

## 日華学堂の宿舎生活における管理と外出

著者	樂 殿武
著者（英）	Ran Hirotake
雑誌名	Global studies
号	4
ページ	29-46
発行年	2020-03-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1419/00001168/">http://id.nii.ac.jp/1419/00001168/</a>

## 日華学堂の宿舍生活における管理と外出

Management of the Nika School dormitory and a Leisurely walk  
described in the Nika School diary

欒 殿 武

### はじめに

1898年、浙江巡撫は8名の学生を選び、日本留学に派遣することに決めた。同年4月に求是書院<sup>1</sup>4名（錢承鋌、陸世芬、陳幌、何橋時）と浙江武備学堂4名（簫星垣、徐方謙、段蘭芳、譚興沛）が来日した<sup>2</sup>。最初、木挽町二丁目の厚生館<sup>3</sup>に滞在し、外務省が候補訳官酒匂祐三を派遣して毎日二時間、求是書院出身の4名に日本語を教えた。6月には本郷区駒込西片町一九番地の民家を借りて、中嶋裁之の監督の下で日本語と普通学を学んだ。これが日華学堂の始まりである。

清国人留学生の予備教育と言え、弘文学院がもっとも有名である。嘉納治五郎は嘉納塾の後、公使李盛鐸と張之洞が派遣した学生を引き受け、1899年10月、神田区三崎町一丁目二番地に亦楽学院を創設し、三矢重松を主任教授に起用して5人の清国人留学生を教授監督させた<sup>4</sup>。1902年、北京警務学堂が数十名の学生を派遣してきたため、亦楽学院は規模を拡大して牛込区西五軒町三四番地に移り、弘文学院と改名し、後に宏文学院に名称を変更して、清国人留学生の急増に応じて分校六校を増設し、東京に押し寄せた清国人留学生の大部分を収容し、隆盛を極めた<sup>5</sup>。

日華学堂は高楠順次郎が外務省の依頼に応じて設立し、自ら総監を務め、清国学生の速成教育を目的に、日本語と普通学の習得を中心として、専門教育の予備教育機関として設立され、わずか三年あまりしか存在しなかったが、北洋政府の国务大臣、大学などの学校長、外交官、政治家、法律家または官僚など、中国近代史に名を残した人材を輩出し、特筆に値する教育機関であった。

ところが、「史話 高楠順次郎」（前嶋信次、『大法輪』1951年7月号～10月号）、『高楠順次郎先生伝』（鷹谷俊之、武蔵野女子学院、1957年）、『雪頂・高楠順次郎の研究 その生涯と事蹟』（武蔵野女子大学仏教文化研究所編、大東出版社、1979年）など、高楠順次郎の生涯を語る書物に日華学堂の設立や教育に関する記述はなく、付属年表の明治三十一年（1898）の項にわずか「この頃、日華学堂を設立、支那留学生を監督」とのみ記載している。高楠順次郎が設立した日華学堂の教育及び中国人留学生教育に果たした役割は、あまり評価されていないのではないと思われる。

本稿では、現存の『日華学堂章程要覧』（以下『要覧』）<sup>6</sup>と『日華学堂日記』（明治三十一年）、『日華学堂日誌』（明治三二～三三年）（以下『日誌』）<sup>7</sup>及び宝閣善教の『燈焰録』と『行雲録』を基に、日華学堂の教育内容と宿舍の管理を、外出の記録など<sup>8</sup>を通じて明らかにし、高楠順次郎をはじめとする日華学堂の教員たちの歴史的貢献を検討してみたい。

## 一、日華学堂に関する研究史

いままで日華学堂をテーマとする主要な先行研究について、管見に入った限りでは、以下の通りである。

もっとも早く日華学堂を取り上げたのは実藤恵秀の「中国人日本留学史稿（五）」（『日華学報』第62号、1937年7月）である。『要覧』に基づき、設立の時期、趣旨、教科及び25名の留学生の入学の時期と氏名を紹介した<sup>9</sup>。また、同氏は「日華学堂の教育——留日学生史談（五）」（『東亜文化圏』3巻2号、1944年）で『日誌』を公開し、宝閣善教の日記『燈焰録』（明治三一）と『行雲録』（明治三二）を参照して日華学堂の教育を解説した<sup>10</sup>。

呂順長は『清末中日教育文化交流之研究』（商務印書館、2012年）の「第八章 浙江早期留日学生」において、日華学堂の創立の時期や浙江省出身の学生たちを取り上げ、派遣の経緯や日本での勉強及びその後の活躍を紹介した。特に日華学堂設立前に浙江省から派遣された汪有齡を始め、求是書院出身の4名にまつわる調査が詳しく、『日誌』への理解に役に立つ。

一方、孫安石は『留学史研究の現段階』（大里浩秋、孫安石編、御茶の水書房、2002年）において外務省外交史料館所蔵の関連資料リストを整理した。初期の清国留学生らに関する資料が多く、日華学堂の学生が注目された。その延長線として柴田幹夫は再び『日誌』全文を読み直し、『日華学堂日誌』一八九八～一九〇〇（『新潟大学国際センター紀要』第9号、2013年）を発表することにより、日華学堂は再注目を浴びた。

このほか徐蘇斌「戦前期日本に留学した中国人技術者に関する研究」、韓立冬「『五校特約』下の高一特設予科」、洪涛「清末留日学生－江蘇省を中心に－」、横井和彦、高明珠「中国清末における留学生派遣政策の展開：日本の留学生派遣政策との比較をふまえて」、張允起『日本法政思想研究』、史洪智「日本人法学者と清朝末期の政治改革」、劉建雲「清末早期的留日政策與郭開文の日本留学」、胡穎「清末の中国人日本留学生に関する研究－主に留学経費の視点から」、拙論「高楠順次郎の教育思想－日華学堂の学生の転地勉強を通じて」などがそれぞれ日華学堂のことに触れて論じている。

## 二、日華学堂設立の経緯

日華学堂は1898年6月に外務省の依頼で高楠順次郎によって設立された<sup>11</sup>。設立の趣旨は「專在教養清國學生。務使學生從速講習我言語。諳熟我習俗。並修普通各科之學。而為治專門各科之地歩。以期培成其材」（専ら清国の学生を教養し、努めて学生をして速やかに我が言語を講習し、わが風俗に諳熟し、並びに普通各科の学を修め、而して専門各科を修むるの地歩たらしむ。以て其の才に培うを期する）<sup>12</sup>ということで、日本語と普通科目の学習を目的とする予備教育機関である。

課程として正科と別科が設置され、正科は普通予備科と高等予備科に分けられ、別科は予備撰科、日本語専修科に分けられた。普通予備科は高等学校と専門学校入学を目標とし、二年制で、日本語と英語または独語、歴史、地理、数学、物理化学、博物学を学ぶ。高等予備科は帝国大学各科入学を目標とし、一年制で、法学、文学、工学、理学、農学等を学ぶ。予備撰科は普通科に通う者が帝国大学または高等専門学校への進学者を速成するために設置されたもので、高等予備

科から選修し、学制は無定期だが、二年間を期限とする。日本語専修科は日本語を学ぶため、約一年間、日本語のみ学習する。

学年暦は9月から翌年の7月まで一年間で、二学期に分けられる。前期は9月5日から翌年2月15日まで、後期は2月20日から7月20日までである。毎日平均5、6時間の授業を行うが、難易度に基づき、随時調整する。日曜日と祝祭日は休む。冬休みは12月29日から翌年1月7日まで、夏休みは7月11日から9月4日までだが、7月22日から8月20日までの間、毎日2、3時間の夏期集中講義を行う<sup>13</sup>。

高楠順次郎は総監を務め、中島裁之は初代堂監（1898年6月～9月20日）、宝閣善教は二代目堂監（1898年9月25日～1900年10月）として教育を監督し、学堂日誌を記した<sup>14</sup>。

各教員の担当科目（1899年2月）と一週間の授業時間数は以下のとおりである。

高楠順次郎（英語、3時間）、宝閣善教（英文法、3時間）、梅原融（物理、化学、会話、読書、15時間）、海野詮教（日本語文法、読書、作文、12時間）、林田源太郎（歴史、英語、6時間）、吉川寿次郎（植物、算数、幾何学、6時間）、桜井義肇（地理、3時間）、酒匂祐三（日本語会話、読書、3時間）、浅田駒之助（会話、実習臨時手伝、物理、6時間）<sup>15</sup>。

宝閣善教は京都文学寮出身で帝国大学文科大学史学科三年生、梅原融は同じく文学寮出身で慶応義塾文科卒業生、海野詮教と林田源太郎は東京専門学校卒業生、吉川寿次郎は帝国大学医科大学三年生、桜井義肇は京都文学寮卒業生、酒匂祐三は外務省候補訳官、浅田駒之助は彦根中学校教師であった<sup>16</sup>。

日華学堂は日本語と普通学を速成するという目的で創立され、二年間のカリキュラムで日本語と普通学の教育を施す予定だが、課程は進学先別に正科と別科で整っているものの、運用の面においては、決してすべて順調ではなかった<sup>17</sup>。

### 三、日華学堂の校舎と寄宿舎の管理

1898年6月に求是書院の学生錢承鋌、陸世芬、陳梶、何橘時<sup>18</sup>が入学した。最初の校舎兼宿舍は1898年6月に本郷区駒込西片町一九番地にあった。

9月25日に汪有齡は学堂に入学した<sup>19</sup>。それから10月31日、浙江省留日学生監督で大阪商人孫淦の紹介で私費留学生の呉振麟<sup>20</sup>が入学した。この6名は浙江省の派遣もしくは孫淦紹介の関係者である。学生が増えたため、11月27日に指ヶ谷町一四〇番地に移転した。

翌年1月20日に南洋公学から派遣された章宗祥、富士英、雷奮、胡昶泰、楊蔭杭、楊廷棟が政治、法律研究を志望し、入学した<sup>21</sup>。日本語レベルの違いにより、甲乙二組ができた。2月6日に私費留学生陳玉堂<sup>22</sup>が入学し、3月17日に、同じく私費留学生鄭康耆が三橋信方の紹介状を持って入学を求めた<sup>23</sup>。さらに、3月31日に、北洋学堂と北洋水師学堂から派遣された官費留学生12名（黎科、張煜全、王建祖、張奎、金邦平、周祖培、安慶瀾、高淑琦、蔡成煜、沈琨、張鎂緒、鄭葆丞）が新たに入学した<sup>24</sup>。

部屋割り是不明であるが、甲乙及び北洋組はそれぞれ二人ずつ一部屋に宿泊したと考えられる<sup>25</sup>。

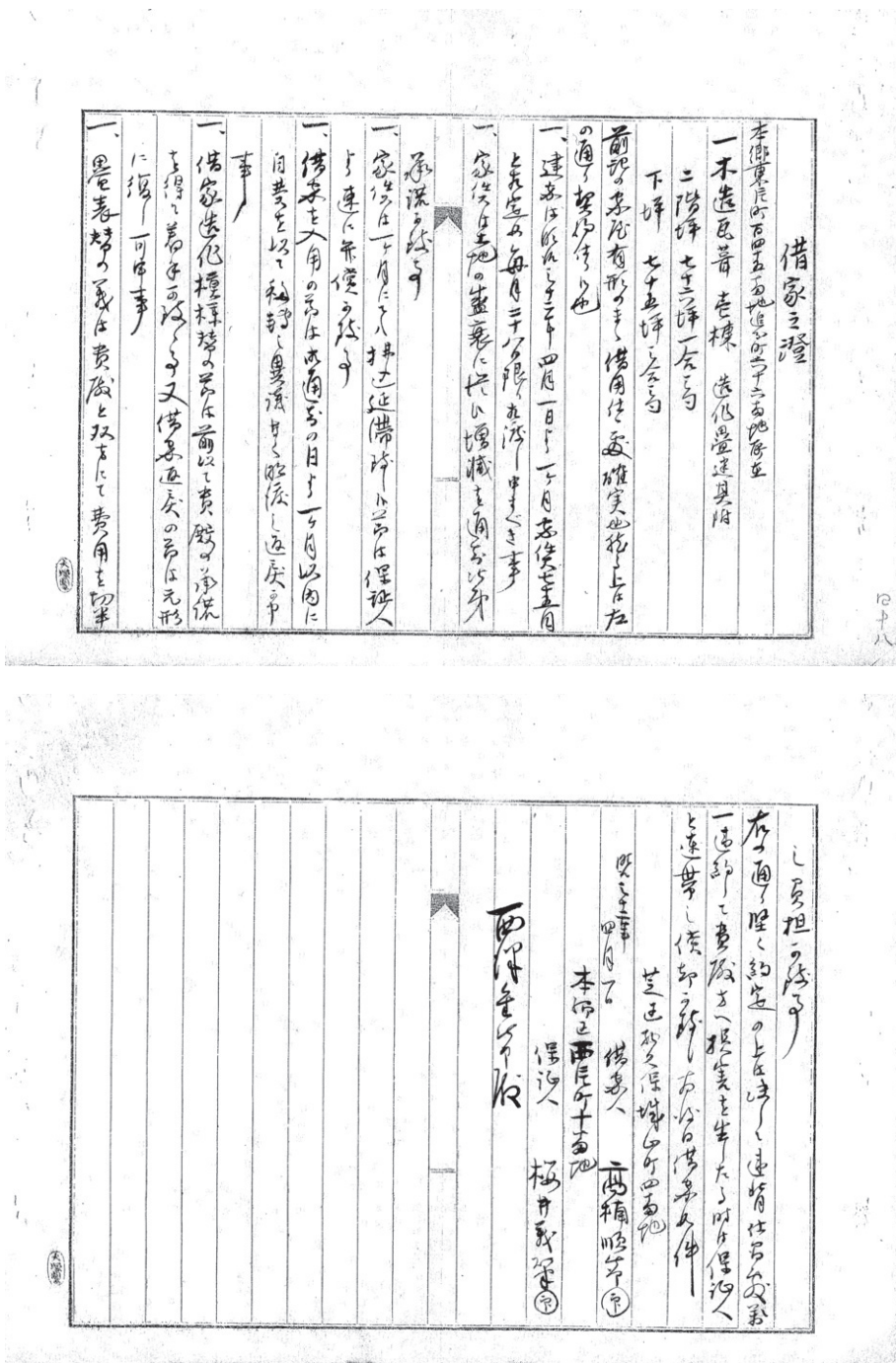


図1 本郷区駒込東片町一四五番地の借家契約書（アジア歴史資料センター所蔵『在本邦清国留学生関係雑纂 陸軍海軍学生外之部』請求番号 3-2533-0012、3-2533-0013 より）



校舎が手狭になったため、北洋組の学生が入学する直前の3月30日に本郷区駒込東片町一四五番地に引っ越した。その借家証書を見ると、木造瓦葺きの二階建て、二階は七六坪一合三勺、一階は七五坪三合三勺、一か月家賃75円、総面積が一五〇坪以上あり、かなり広い民家であった。

地図で見れば、①駒込西片町一九番地、②指ヶ谷町一四〇番地、③駒込東片町一四五番地という三つの校舎はすべて東京帝大と第一高等学校からほど近い場所にあった。

一階は教室、二階は宿舍となるが、寄宿舍の構造としては、寝室、自習室、応接室、舎監室、宿直室、小使室、食堂、浴室、盥漱室などがある。現在、校舎の図面は残っていないが、『日誌』の内容から、宿直室を除き、ほかの部屋が全部揃っていることが読み取れる。



図2 指ヶ谷町と駒込西片町（『江戸・明治・東京重ね地図』エーピーカンパニー、2009）

1899年3月30日から田代直樹が舎監を務めたが、9月1日に時事新報社に移った。二代目舎監として上田三徳は1900年3月17日から6月28日まで務めたが、清国へ行くため学堂を辞した。同年9月16日に、高嶋米峰は三代目舎監になったが、わずか二ヶ月ほどで学堂をやめた<sup>26</sup>。

1898年末、清国留学生を教育する予備教育機関として、東京には嘉納塾、成城学校、日華学堂、東京同文書院<sup>27</sup>しかなく、外務省の機密文書を見ると、この時期に外務省経由で受け入れた場合、武備留学生を成城学校に、文科留学生を日華学堂に入学させた。日華学堂は学生数が伸びて、経営が順調に軌道に乗った。そのため、『日華学堂章程要覧』を印刷し、矢野駐清国全権大使を始め50部、上海、天津、漢口、杭州領事館宛に30部、さらに一時帰国する湖北学生監督塩運使銜分省知府銭恂に50部を託して、積極的に募集活動を行った<sup>28</sup>。

日華学堂の学生は、全員寄宿舍に宿泊し、厳重な監督の下で共同生活をしながら勉強していた。『要覧』第五章に一八カ条となる学生の心得が次のように示されている<sup>29</sup>。

第一条 学生ノ举止動静ハ中国ノ規範ヲ守ルヘシ。日本ノ習俗ノ優レタ処ヲ併セルヘシ。以テ完壁ヲ期ス。

第二条 学生ハ礼節ヲ重ズルヘシ。信義を尊ウヘシ。以テ言動ノ一致ヲ期ス。

- 第三条 凡ソ学生ハ自ト本堂ノ定メル章程及ビ隨時示スヘキ条例ヲ守ルヘシ。併セテ教師ノ指令ヲ受クヘシ。
- 第四条 凡ソ学生ハ講堂ニ於テハ、静肅ヲ守ルヘシ。行動ハ悉ク教師ノ指導ヲ聴クヘシ。質疑ヲ除キ、雑談スヘカラス。
- 第五条 学生ハ講堂ニ入りテ講ニ就キテ起立敬礼ヲ行フテ、退出ノトキ亦此ノ如シ。講堂ノ外ニテ教師と会ウトキ、亦敬礼ヲ行フヘシ。
- 第六条 学生ハ講堂ニテ隨時務メテ規約ヲ守ルヘシ。試験及ビ課業ノ時、教師ノ許可ヲ得ナクシテ談話スヘカラス。若シ従ハサルトキ処罰スヘシ。
- 第七条 室内ハ努メテ清潔ヲ保ツ可シ、常ニ整頓スヘシ乱雑ナルヘカラス。
- 第八条 凡ソ室内ニ於テハ静肅ナル可シ放歌喧囂ノコトアルヘカラズ。書ヲ読ムトキ亦黙読スヘシ。他ノ人ノ修習ヲ妨ゲルヘカラス。
- 第九条 学生ハ室内ニテ自習ノトキ、必要ナクシテ他室ニ至リ雑談スヘカラス。
- 第十条 朝起夜寝ノ時刻、冬夏ニ稍遅早ニアルニシテ、凡ソ午前六時ニ起床ス。午後十時ニ就寝ス。
- 第十一条 消灯後ハ談話スヘカラス。
- 第十二条 一切ナル茶果点心ハ室内ニ携帯スヘカラス。
- 第十三条 外出ノトキハ振舞ヲ留意スヘシ。以テ体面ヲ保ツ可シ。
- 第十四条 外出時間ノ外、外出ノ必要アルトキハ其許可ヲ得ヘシ。但シ万己ムヲ得サル事故アリ外出ヲ要スルトキハ舎監ニ申出テ其許可ヲ受クヘシ。
- 第十五条 疾病若シクハ事故アリテ課業ニ出席スルコト能ハザルモノハ舎監ノ指令ヲ俟ツ可シ。
- 第十六条 疾病アルモノハ舎監ニ申出テ治療ヲ受クヘシ。
- 第十七条 考察員ヲ除キ外人ノ応接ハ応接処ニ於テスヘシ随意他室ニ引入ルヘカラス。
- 第十八条 右ノ場合ニ於テハ能ク礼儀ヲ守リ若シ違反スルトキ、訓戒ヲ加ヘルヘシ。再三訓戒ヲ加ヘテ尚順守セサルトキハ其輕重ヲ見テ謹慎停学退学等ニ処スヘシ。

これを見ると、第一条～第三条は学生としての心得、第四条～第六条は教室における受講態度で、静肅、私語の禁止など、かなり細かく規定されているが、当時の規則としては一般的だったのであろう。第七条～第一七条は寄宿舎の基本的な規則で、共同生活におけるマナーが多く規定されている。特に第八条、第九条は自室での静肅、音読の禁止、ほかの部屋での雑談の禁止など、かなり厳しく決められているが、やや遅れて創立した東京同文書院の寄宿舎規則では、「痰壺の外に痰を吐くな」、「勝手に料理を作るな」、「食事の時に勝手に料理をよそうな」、「小間使いを勝手に使うな」など細則が規定されており、この規定に比べると、従来の宿舍管理の規則の範囲内であると言える。

『日誌』によれば、嘉納塾の留学生が訪ねてきて日華学堂の学生と歓談したり、成城学校の留学生が来訪したり、王子養蚕伝習所に留学中の嵯侃が訪問に来たりして、時には一泊の許可を求める記録もある。最初6名の時期は人数が少ないため、柔軟に対応したが、1899年1月20日に南洋公学から6名が加わった後、25日に堂則を制定し、堂生に訓示した。その後、2月4日に「此日邦人の学友にて無断自習室に入り堂生と会語する者あり。直に注意を与へて面謁所に就て会談せしむ。夜堂生を集て論示する所あり」と、堂則に則り、管理運用を厳しく行うようになった。

このほか、現存の日華学堂の集合写真には、宝閣と最初入学した6名の浙江省の留学生が映っており、みな中国服であったが、1898年10月に入ってから、洋服、革靴、帽子を買い求め、制服を着るようになった。翌年の3月3日に「武田店より新入生七名の新調洋服を持参す」、9日に「榊商店より新堂生の帽子を持参す」との記録があった。これにより、校舎、カリキュラム、堂則、制服と帽子など、学堂の体制が整いつつあった。



図3 浙江省派遣の留学生と合影 後列左より何橘時、宝閣善教、陳梶  
前列左より錢承鋹、陸世芬、汪有齡、呉振麟  
（『宝閣先生追悼号』中央商業高等学校 1940 より、氏名は筆者追記）

寄宿舎での共同生活は、規律ある生活習慣を身につけることができるとされ、学生たちは、集団生活を通して仲間意識や友情を育むことができ、一種の共同体の中での教育効果と学風の改善が期待された。寄宿舎のもう一つのメリットは、父兄に代わって地方出身の若者を都市の誘惑から隔離監督することであった。寄宿舎は学校教育の一側面であり、営利を目的としないため、舎監の献身的な監督により、学生は学業と人格形成の両面においてよい成績を挙げることができ、集団生活を通して、規律遵守、人間関係の形成、規則正しい生活習慣など、社会生活の適応性の養成に役立つことができた。

明治時代に厳しい規則と厳格な舎監によって管理され、時には舎監が規則を杓子定規にはめようとする時、寄宿生と舎監の対立、いわゆる「舎監排斥」がしばしば引き起こされた。寄宿舎の管理について、女子大学校長の成瀬仁蔵は「仮令バ寄宿舎の如きハ、動もすれば監獄と同じ制度で、乾燥無趣味極まる組織となつて居る為めに、少しも人生の快味を解し得ない」（「女子教育諸大家の談話」（六）『読売新聞』1902年10月23日付）と批判し、「学生の集合すべき寄宿舎を、家庭的の趣味ある愉快な処にして、家に居ると同様の組織となし、倶楽部亦も作つて、兎に角生徒が



充分に満足するやうに仕なければ可けません」(同前)と、対策を唱えた。

日華学堂は成立当初から、初代堂監中嶋と二代目堂監宝閣が学生を連れて頻繁に外出し、明治維新後の東京の近代を見聞しながら、異国での生活を楽しめるよう努力した。

#### 四、『日華学堂日誌』に記載された外出

前記の宿舍規則の「十四条」に「外出時間ノ外、外出ノ必要アルトキハ其許可ヲ得ヘシ。但シ万己ムヲ得サル事故アリ外出ヲ要スルトキハ舎監ニ申出テ其許可ヲ受クヘシ」とある。宿舍の管理として、勝手に外出することが禁じられている。これは当時の一般的な宿舍管理の慣例である。ところで外出時間とは何であろうか。『日誌』を繙くと、先生たちが学生を連れて外出する記録が非常に多い。最初はほとんど夕飯後の散歩<sup>30</sup>であったが、7月29日に湯島辺りへ出かけた記録は見逃せない。

『日誌』には詳細を記載していないが、中嶋の引率の下で湯島聖堂へ行き、大成殿を見学した可能性が容易に推測される。湯島聖堂は江戸時代、昌平黉と呼ばれ、幕府直轄の学問所<sup>31</sup>であったが、明治以降、湯島聖堂の構内に文部省、博物館<sup>32</sup>を経て、1898年当時、東京高等師範学校及びその附属学校<sup>33</sup>が併設されていた。孔子は東洋の知識人に聖人のように崇められたため、中嶋は来日したばかりの学生たちを東京の孔子廟へ連れて行き、儒学への日本知識人の心酔ぶりを説明したのかもしれない。



図4 高等師範学校一覧 明治31年(1898)4月-32年3月、国立国会図書館所蔵写真帳より

本格的な遠足は7月31日であった<sup>34</sup>。中嶋は学生4名を上野の博物館、動物園、パノラマ館へ連れて行った。7月の上野は不忍池の蓮が見どころで、池一面の蓮の葉が青々とし、その間にピンクの花が咲いている。蓮のある風景は、学生たちにとって懐かしい故郷の中国庭園の景色である。また中嶋は博物館と動物園で「物格知至ノ便ヲ得テ學術上説明ヲ加ヘ」た。博物館、動物園は近代的な国家に欠かせない文化施設で、教育的な役割を果たしている。博物館の付属施設として開設された動物園も、開園から象は人気があり、熊、鹿、イノシシなどの国内に生息している動物のほかに、虎、ヒョウ、ラクダ、水牛などの外国の動物が飼育されており、観光客が押し寄せた<sup>35</sup>。1898年には、オランウータンが初来園して、見物客で連日賑わった<sup>36</sup>。31日に学生たちは動物園で話題のオランウータンを見たのではないかと推測される。

日華学堂の先生たちが、学生を引率してもっとも多く出かけた場所は上野である（11回数えられる<sup>37</sup>）。上野は日華学堂の校舎から徒歩圏内にあり、夕食後の散歩に適していた。また上野は東京の最大の公園であり<sup>38</sup>、博物館をはじめ、日本の近代を表象する施設が多く集まっていた。

上野にはもともと江戸時代から約300年にわたって徳川幕府の保護により、別格の地位を誇り権勢天下に君臨した寛永寺があり、上野戦争で江戸きっての名刹と豪華さで知られた諸堂は灰塵に帰したが、その後、寺領の大部分が国に没収され、公園に指定された。面積2万2000坪、東京でもっとも大きな公園である。公共の公園は、中国人留学生にとって間違いなく未知の新しい都市空間であった。

上野公園には高台があり、その下に不忍池が控え、「山水の勝景に富む」と言われている。江戸時代には庶民が寛永寺を中心とした上野に出入りすることができなかったが、明治五年（1872年）ごろから、近代国を象徴するような施設が次々と建設された。明治九年（1876年）に明治天皇行幸のもと、公園開園式が開かれ、勸業博覧会、平和博覧会、尊都記念祝賀会などの行事はすべて上野公園で行われるようになった。

明治十一年（1898年）には、上野公園内に帝室博物館<sup>39</sup>、動物園、パノラマ館、東照宮、徳川霊廟、清水観世音、弁財天、大仏、鐘楼、忍ヶ岡稲荷、東京美術学校、西郷隆盛銅像、彰義隊碑などがあつた。

具体的に『日誌』から上野公園での活動を見ると、8月30日夕方、10月7日晚餐後は散歩、10月23日は「午前学生を伴ひ上野に遊び、白馬会の油絵展覧会を観る」とあることから、上野公園で開催された白馬会の油絵展覧会を観覧したとわかる。白馬会はフランスから帰国した黒田清輝と久米桂一郎らが1896年に9月に明治美術会を脱退して結成した洋画家のグループで、同年10月から毎年一回展覧会を開催した。1898年の白馬会は10月5日から上野公園で展示が始まり、黒田清輝の「寂寥」「小督の昔語」「美人干物の図」、久米桂一郎の「残燵」など多くの作品が展示された<sup>40</sup>。白馬会の展覧会は、社会から大きく注目され、『国民新聞』、『時事新報』、『東京朝日新聞』、『日本』、『毎日新聞』、『都新聞』、『読売新聞』、『萬朝報』に評論記事などが掲載された。

日華学堂の学生たちは、日本の洋画界を代表する画家の作品を見て、西洋美術の洗礼を受けたのではないかと考えられる。中国近代画家の李叔同<sup>41</sup>と曾延年が東京美術学校に留学し、油絵を学ぶのは1906年であったが、その8年前、日華学堂の学生はすでに黒田と久米の作品を目の当たりにしていた。おそらく彼らは日本の西洋画を鑑賞した最も早い中国人留学生ではなからうか。

『読売新聞』（1898年10月24日付）によると、10月23日午前10時に、憲政党青年大会が上野公園で行われ、3000人以上の憲政党関係者が参加し、午後2時に散会した。このような大規模な

集会について、『日誌』に記載されていないが、見なかったとは考えにくい。近代的な政党政治の集会を身近に見て、若い留学生たちがどんな思いを抱いたのか、興味深いところである。

10月31日に浙江省留学生監督孫淦が、私費留学生の呉振麟を連れて日華学堂に入学させると、6名の留学生と一緒に上野を散歩したほか、11月19日に動物園見学、12月25日、翌年1月3日、1月22日に散歩したという記録がある。このうち注目すべきは12月25日の散歩である。

上野公園のシンボルである西郷隆盛の銅像は1889年（明治二二年）3月に計画され、同年10月に芝弥生館に事務所を立ち上げ、全国的に寄付を募り、2万5000人以上から寄付を受けた。銅像の設計は高村光雲で、制作は東京美術学校の岡崎に依頼した。1893年（明治二六年）に起工し、4年以上の制作期間を経て、1898年12月18日午前10時に落成式を行い、各大臣華族及び西郷未亡人糸子、忠僕永田熊吉など各界から数百名が式典に参加した<sup>42</sup>。「翁の像ハ既に記したる如く長さ二丈にして薩摩飛白を着し猊犬を曳きたる銅像なり両眼炯炯威容儼乎として東台昨日より一の名物を加へたり」と報道された<sup>43</sup>。

25日に学生たちは落成したばかりの西郷の銅像を見て、どんな感想を持ったのであろうか。西郷隆盛は近代日本で南州翁と呼称され、その「敬天愛民」の思想は、福沢諭吉を始め、内村鑑三、中江兆民、宮崎滔天などから賛美と尊敬を受けていた。西郷隆盛像を見物した中国人の名は、しばしば章炳麟、黄興、宋教仁などが挙げられるが、日華学堂の学生たちが最も早かったかもしれない。西郷像の後ろにある彰義隊碑も、注目するスポットである。西郷の侠と彰義隊の忠については、引率の中嶋から説明があったと推測されるが、学生たちにとって感銘を受けやすい内容であろう。

1月22日は南洋公学から新たに来た6名と一緒に散歩し、新堂生に上野周辺を紹介した。上野公園には、「電気鉄道」「自働鉄道」「風船乗り」「モノレール」など時代の先端をゆく娯楽施設もあり、明治時代の初期から文明開化の先駆地で、近代国家を象徴する場所であり、また東照宮、徳川霊廟、清水観音、弁財天、大仏、鐘楼、忍ヶ岡稲荷など、江戸時代の文化的な粋を集めた施設もあり、近代的な文化の探求、江戸時代の文化の回顧、そして自然の散策など、絶好の場所であった。

上野公園のほか、中嶋と宝閣は学生たちを小石川植物園にも連れて行っている。植物園は小石川白山御殿町にあり、東京帝国大学理科大学付属の施設である。周知の通り、小石川植物園は、貞享元年（1684年）、第五代将軍徳川綱吉が将軍職に就く前に住んでいた白山御殿の跡地に、徳川幕府が設けた「小石川薬草園」がその原点である。明治維新により東京府管轄、大病院附属御薬園と改称し、大学東校管轄、文部省所轄教育博物館附属を経て、1877年（明治一〇年）に東京大学設立に伴い、法理文三学部附属植物園となった。1886年（明治一九年）に帝国大学令の発令により、理科大学に管理替え、帝国大学理科大学植物園と改称した。小石川植物園とはその通称である。園内の西端には、白山御殿時代の名残である日本庭園が広がり、台地、傾斜地、低地、泉水地など地形の変化に富み、様々な植物が配置されているため、徳川時代の大名庭園として鑑賞するには絶好の場所であり、植物園内を散策しながら江戸時代の薬作りを偲ぶことができる。池に蓮があり、花菖蒲があり、アシが生え、睡蓮やジュンサイの花が咲き、園内には四季折々の花が咲き乱れ、喧噪雑多の大都会の中で、砂漠のオアシスのように人々に息抜きを提供している。

『日誌』の記載を見ると、1898年8月14日に「学生四名ヲ供ヒ植物園ニ至ル。其ノ途上雨ニ遭



ヒ到達セズシテ帰舎ス」とあり、雨に遭い、途中引き返した。そのため、中嶋は9月18日の日曜日に再び学生4名を連れて、小石川植物園を鑑賞した。その二日後、中嶋は病気を理由に日華学堂を辞している。10月15日土曜日は快晴で、中嶋に代わり堂監に就任した宝閣が、再び学生を引率して小石川植物園に行ったとの記録が残っている。

一方、庶民の街である浅草に出かける回数は、少ない。『日誌』を読むと、1898年8月21日、11月5日、1899年1月7日の3回だけである。11月5日は梅原引率で汪と呉の二人だけが浅草へ出かけた。

最初の浅草散策については、『日誌』に「午前七時ヨリ学生同伴浅草凌雲閣ニ登リ観音ニ詣テ其ヨリ馬車ニテ新橋ニ至リ人車ニ乗リ換ヘ赤坂溜池町同文会中西氏ヲ訪フ」とある。浅草は庶民にとってエンターテインメントの街で通称「十二階」の凌雲閣のほか、浅草寺と浅草公園（第一区から第六区まで<sup>44)</sup>）がある。特に六区は東京一の盛り場で、見世物小屋、寄席、演芸場などが雑多にひしめき合う興行の街である。

凌雲閣は1890年（明治二三年）に建てられた煉瓦塔で、明治中期から大正の終わりにかけて浅草を象徴し、近代都市東京を代表する建造物であった。凌雲閣の内部には二階から六階まで、混成旅団上陸と海戦など、日清戦争を主題としたジオラマや油絵などが配置され、日本の名勝と吉原百美人および各国の風景写真の展示があり、また蓄音器を据えつけて、役者の声色や謡曲の鑑賞などができた。七階には東京名所図絵、八階に新聞縦覧所があり、九階には休憩室があり、ビール、葡萄酒、茶菓などを楽しみ、三幅の裸体美人画があり、近代都市空間への想像を掻き立てる場所であった。

一〇階から螺旋階段を登れば、一一階と一二階の展望台に出て、東京の景色を眼下に収める。『最新東京案内記』の説明によれば、「一たびこの十二階上に登れば、満都を呑んで天下を小とするの感あり。唯見る煙突林立、蒸々雲のぼり、大廈櫛比、魚鱗をつらね、蒼茫天と接する所、熱海沸くがごとき、肩摩穀撃の状、ここ万街の一大活劇場裡を、眼前にするにつけても、その昔、芒草離々、狐狸空く寒月に叫びし武蔵野の荒涼を想起し、有為転変の迅なるに驚かれて、誰かは今昔の感にたゆべき」とある。さらに房総半島、筑波の山々、箱根の連嶺、富士山の景色などの遠景、日本銀行、ニコライ堂、浅草電灯会社の煙突、上野公園の森などの眺望を描写した。

一二階から見た煙突と西洋建築の立ち並ぶ東京の近代的な空間は、間違いなく来日したばかりの学生たちにとって近代への開眼につながったが、一方、日清戦争を描いた油絵もショッキングな経験になったのではなかろうか。これらの油絵について、『日誌』に記述はなく、今では彼らの気持ちを推し測ることはできないが、靖国神社に展示された日清戦争の戦利品を打ち壊す留学生がいたりしたため、これらの展示は中国人学生にとって民族意識の高揚につながったと言えよう。このほか、宝閣の日記を読むと、学生たちと外へ出かける際に、町中で子供らに罵声を浴びたことがあり、相当困ったと書いてある。これも東京に来たばかりの中国人学生たちに相当刺激を与えたと考えられる。

『日誌』によると、中西の家を辞してから学生たちは空腹に耐えながら、汽車と人力車に乗り、2時ようやく宿舍に戻った。その理由を「煮売店、料理屋ナンドニ於テ醜風ヲ見センバ惑ハシムルノ道ナリト思ヒ遂ニ強骨ニ引キズリ廻ハシテ」と説明がある。

料理屋の「醜風」については、上村貞子編『官公私立諸学校就学案内』（博文館、1904年）に、



「勤儉に、堅忍に、専心一意其道に進まんと、眞面目につとむる学生あらば、冷遇し、甚だしきは、席亭や芝居に誘出し、はては飲食店に勧誘し、あやしき魔道にも引き入れんとし、薄志弱行のものは、始めの固き決心も、遂ひに軟化して、好個の学生と歌はれしも夢の間、墮落書生の標本となるが如きものなきにあらず」<sup>45</sup>と指摘している。

この直前の『日誌』に辻武雄の送別会に関する記述があり、その中で別室を通る際に「女郎一四五名腰ヲ露ハシ脛ヲ上ゲテ仰天シテ躺ス。其醜体云ウ可ラズ。学生ヲシテ之ヲ見得ザル事ヲ勤メタルモ策ナカリシバ実ニ日本ニ斯ノ如キノ醜風アル事ヲ知ラシメタリ」<sup>46</sup>とある。これを見れば、料理屋の「醜風」とは、来日したばかりの学生たちに墮落させないように、教育者の立場からの発言であると同時に、国の体面を著しく落とすという国辱論的な考えに基づくコメントである点も否定できない。

さらに青山練兵場、靖国神社の大祭、内親王葬儀と大婚式を拝観に行ったことも記録に残っている。

全体的に見ると、1898年7月から翌年1月17日まで、つまり最初の浙江省出身の6名の時は、外出が多く、上野公園、動物園、博物館を始め、小石川植物園、浅草、道灌山<sup>47</sup>、飛鳥山、団子坂、芝公園、皇居、銀座、京橋などを散策したり、神田、本郷の本街を散歩したり、三崎町の嘉納塾と成城学校を訪問したりした。『日誌』には70回の散歩と訪問記録があるが、そのうち46回が浙江省の6名との外出であった。

1899年1月20日に南洋公学から派遣された6名が入ると、1月22日に上野公園へ散歩、2月11日に偕楽園で新年会を催した。北洋組の12名が加わると、学堂の学生数は26名に達し、以前のように全員で外出することが難しくなったため、外出の記録は一気に減った。その後、全員で外出したのは、塩原への転地勉強だけであった。

## おわりに

日華学堂は成城学校とともに、外務省が指定した清国留学生の予備教育機関であり、章宗祥、金邦平ら国務大臣、王建祖、張煜全、何橋時、汪有齡ら学校長、呉振麟、富士英、胡祜泰ら外交官、楊廷棟、雷奮、張鎂緒、陳榘ら政治家、法律家または官僚を多く輩出したが、僅か三年ほどで閉校してしまった<sup>48</sup>。

高楠を始め、京都西本願寺文学寮で学んだ日華学堂の関係者たちは、仏教精神で清国留学生の教育と指導に親切かつ熱心に取り組んだ。教育活動のほか、校舎兼宿舎を探し、コックを探し、健康維持に必要な運動設備を作らせた。

宿舎生活を送る学生たちは本来、管理された生活者で、単調な日常の繰り返し、粗悪な食事、外出禁止など、不満を持ちがちであるが、本稿で考察したように、中嶋を始め、宝閣や梅原などの教員は留学生たちを連れて上野、小石川植物園、浅草などを散策したりして、学堂の先生たちが献身的に外出に連れて行くことで、学生たちは心身ともにリフレッシュし、学業を続けることができた。

外出は単なる気分転換ではなく、現在の小学校で行われた学外学習のように、四季折々の自然を観察したり、博物館、美術展、植物園及び明治維新以降発展を遂げた東京の近代的な表象を見学したり、教育目的も含まれ、また刺激的な都市空間が満ちあふれた東京の異文化環境の生活を

体験した。

その結果、日華学堂は有為な人材を育て、嘉納塾や成城学校と並んで、初期の清国留学生教育に大きな役割を果たした。時期尚早であったのは惜しまれるが、留学生の予備教育機関を経営した経験は後の中央商業学校と武蔵野女子学院の創立と経営に生かされ、大きく実を結んだ。

## 注

- 1 求是書院は1897年に創立された中国において最も早い普通学校の一つ。1898年から日本に留学生を派遣し、1901年に浙江求是大学堂に改称、1928年国立浙江大学となった。
- 2 浙江省巡撫廖寿豊の指示を受け、知県候補張大鏞は蔣錫之と共に引率し、日本各種学校を視察して8月に帰国した。
- 3 1881年に福沢諭吉の提案で演説会専用の会場として「明治会堂」の名称で建設されたが、1883年に農商務省に売却され、翌年に「厚生館」と名称を変え、農商務省所轄の公的な会館になり、旅館、集会場などに利用されたが、関東大震災の時に焼失した。
- 4 その5人は戩翼輩（湖北）、鄒瑞昌（安徽、25歳）、熊垓（江西、17歳）、黃大暹（四川、17歳）、李盛銓（江西、19歳）である。戩翼輩は1896年に始めて来日した官費留学生13人中の1人で、この時、既に東京専門学校（早稲田大学の前身）に通っていると考えられる。
- 5 1909年7月28日の閉校まで、入学者7892人、卒業者3810人であり、数多くの留学生に留学予備教育を行った。
- 6 アジア歴史資料センター所蔵の「日華学堂章程要覧配布一件」（請求番号3-2533-8～10）に外務省三橋書記官宛の高楠の書簡に矢野駐清国全權大使に50部、上海、天津、漢口、杭州領事館宛に30部、さらに一時帰国する湖北学生監督塩運使銜分省知府銭恂に50部を託したとの記載がある。現在、西安交通大学史料館に南洋公学の創立者盛宣懷の関係資料に写真、『皇朝蓄艾文編』に上海官書局印刷の1899年6月30日付の原文が保存されている。
- 7 柴田幹夫『日華学堂日誌 一八九八～一九〇〇』（『新潟大学国際センター紀要』第9号、2013年）参照。日誌は1898年7月19日から1900年10月26日までの記録である。
- 8 最長の外出は学堂全員の転地勉強であるが、拙論「高楠順次郎の教育思想——日華学堂の学生の転地勉強を通じて」『武蔵野大学GLOBAL STUDIES3』（2019年3月）を参照されたい。
- 9 『中国人日本留学史』（くろしお出版、1960年）ではほぼ同じ内容を継承した。
- 10 この日誌は、宝閣善教の『燈焰録』と『行雲録』と並び、日華学堂の教育及び学生たちの日常生活を理解するのに欠かせない第一級の史料である。
- 11 1898年3月2日に、高楠順次郎は大学講師のまま、通信大臣末松謙澄の秘書官となり、この関係から外務大臣秘書官三橋信方に日華学堂設立を依頼されたと思われる。6月以降、日華学堂の仕事に集中するため、7月8日に通信大臣秘書官を依願免官となった。
- 12 『要覧』設立趣旨を参照。筆者訳。
- 13 学年暦は『在本邦清国留学生関係雑纂 陸軍海軍学生外之部』と『要覧』第二章で少し異なるが、本稿は『要覧』を参照。
- 14 筆跡から見ると、田代などの舎監が学堂日誌を記した可能性もある。
- 15 同年3月10日付で高楠が外務省に提出した「南洋公学堂学生就学概況報告」には浅田に代わり、美濃田琢磨（代数）の名前が見られた。
- 16 『在本邦清国留学生関係雑纂 陸軍海軍学生外之部』（3-2530-0066）を参照。
- 17 入学時期により、日本語レベルが違い、甲乙クラスを分けるほか、浙江出身を始め、一部の学生は早く予備教育を切り上げて専門学校や大学に入りたがった。
- 18 『読売新聞』（1898年6月10日、12日）に彼らの来日を報道した。
- 19 汪有齡は蚕の養殖を学ぶために杭州府から派遣され、1897年（光緒二十三年）12月15日（旧暦11月22日）に神戸に着き、

- まず大阪で山本憲に日本語を学び、孫滄の斡旋で翌年3月に埼玉県児玉郡競進社に移り、蚕の養殖を学び始めた。時事政治に興味を持ったため、進路変更を杭州府知事に申し出て、許可を得て日華学堂に入学し、専門学校を目指した。『要覧』と『汪康年師友書札』（上海図書館編、上海古籍出版社、1986年）汪有齡一九（1089頁）を参照。
- 20 呉振麟は来日する前に、上海育才書塾で二年間英語を学んで卒業した。1898年10月22日に日本陸軍大演習を見学するために派遣された雷芸桂と共に上海を立った（アジア歴史資料センター所蔵の「在本邦清国留学生関係雑纂陸軍学生海軍学生外之部」請求番号3-2530-0045～46）を参照。
- 21 章宗祥は浙江省湖州府烏程県出身で21歳、雷奮は江蘇省松江府華亭県出身で20歳、以上2名は師範の学生である。富士英は浙江省嘉興府海塩県出身で19歳、胡祜泰は江蘇省太倉州宝山県出身で21歳、楊蔭杭は江蘇省常州府無錫県出身で21歳、楊廷棟は江蘇省蘇州府呉県出身で19歳、以上4名は中院生である。『要覧』と青木外務大臣への宝閣善教の「御届」（『在本邦清国留学生関係雑纂 陸軍海軍学生外之部』3-2520-0052）を参照。
- 22 陳玉堂は廣東省潮州府海陽県出身で、その兄陳步鑾は広東の豪商である。
- 23 清国参事官代理羅庚齡の依頼により三橋は日華学堂への入学を紹介した。鄭康耆は広東省香山県出身で19歳、当時横浜居留地二二一番館に寄寓していた。（『在本邦清国留学生関係雑纂 陸軍海軍学生外之部』3-2520-0074）を参照。
- 24 北洋頭等学堂からは三名で、出身地として、黎科は広東省新会県出身で20歳、張煜全は広東省広州府南海県出身で19歳、王建祖は広東省番禺県出身で21歳である。二等学堂から三名で、張奎は江蘇省松江府上海県出身で18歳、金邦平は安徽省徽州府黟県出身で18歳、周祖培は江蘇省蘇州府呉県出身で18歳である。残りの六名は北洋水師学堂の学生で、安慶瀾、蔡成煜、張錫緒は直隸省天津府天津県出身でそれぞれ20歳、20歳、23歳である。高淑琦は浙江省杭州府錢塘県出身で22歳、沈琨は直隸省靜海県出身で23歳、鄭葆丞は福建省福州府閩県出身で19歳である。彼らは本来、海軍を学ぶために海軍学校への入学を希望したが、海軍側に断られたため、やむを得ず進路変更をし、日華学堂に入学した。
- 25 孫滄が日華学堂の学生を訪ねた時に、汪有齡と呉振麟の部屋に泊まった。
- 26 11月23日に加藤玄智より博文館入りを勧められ、11月29日に亀鶴館に引っ越した。『高嶋米峰自叙伝』（高嶋米峰、大空社、1993年）の年譜（明治三三年の項）を参照。
- 27 1898年11月に創立された予備教育機関で、場所は神田区錦町三丁目一八番地である。柏原文太郎が創立の功労者で、清国留学生教育を積極的に受け入れるよう、外務文部両省を説得した。1898年7月30日に日華学堂を訪問し、情報交換をした。
- 28 『在本邦清国留学生関係雑纂 雑ノ部』（3-2533-0009）を参照。
- 29 『要覧』第五章に基づき、筆者が訳した。
- 30 7月21日は帝国大学キャンパス内、22日は上野公園、29日は湯島。
- 31 1690年（元禄三年）、林羅山が上野忍が岡の私邸内に建てた忍岡聖堂「先聖殿」に代わる孔子廟を造営し、將軍綱吉がこれを「大成殿」と改称した。またそれに付属する建物を含めて「聖堂」と呼ぶように改めた。1797年（寛政九年）林家の私塾が、林家の手を離れて幕府直轄の昌平坂学問所となる。これは「昌平黉」とも呼ばれる。
- 32 現在の東京国立博物館及び国立科学博物館の前身。
- 33 東京教育大学を経た現在の筑波大学と現在の筑波大学附属小学校及び筑波大学附属中学校・高等学校。
- 34 7月23日に、梅原と酒匂は学生を伴って団子坂に出かけた。31日は日曜日で中嶋は学生4名を連れて上野でゆっくり散策した。
- 35 『東京名所図会』によれば、入園料は大人二銭であった。
- 36 『読売新聞』1898年7月26日付の岸田吟香の所感文、9月26日付の記事「さまざま」を参照。ちなみに、このオランウータンは同年11月28日に病気で死亡した。
- 37 具体的に見ると、1898年7月31日、8月30日、10月7日、10月17日、10月23日、10月31日、11月19日、12月25日及び1899年1月3日、1月22日である。
- 38 1873（明治六年）1月15日の太政官布告に「今般各地に於て名境勝区を撰び、人民遊覧の地となし、長く公園と可被定旨被抑出候に付於当府下は、左の記載する五ヶ所の地を公園と相定め候事 金竜山浅草寺 三縁山増上寺 飛鳥山 東叡山 寛永寺 富岡八幡社地」とある。
- 39 現在の東京国立博物館の前身。1872年（明治五年）、文部省博物館と称して上野公園に創設された。1889年（明治二二年）、帝国博物館、1900年（明治三三年）、東京帝室博物館と改称し、1947年（昭和二二年）までこの名称は使用された。

- 40 『読売新聞』（1898年10月9日付）によると、黒田と久米以外、広瀬勝平の「海岸」、和田英作の「富岳」「機織」、湯浅一郎の「松林」「船」、藤島武二の「秋の海岸」、山本森之助の「林間の草花」「松林」、長原孝太郎の「百合」、安藤伸太郎の「夏木立」、「五月雨」、中村勝次郎の「団欒」、北蓮蔵の「葬ひ」「冬枯」、白滝幾之助の「樵夫」、小林万吾「馬士」「菜畑」、ラファエル・コランの「婦人」、ロドルフ・ウィッツマン夫妻の「秋の並木」「夏の月夜」「草花」などの作品が展示された。
- 41 留学の時に、李叔同は李岸、李哀の名を名乗っていた。当時、彼は黒田の絵画に憧れていた。
- 42 『読売新聞』（1898年12月19日付）「西郷隆盛翁銅像除幕式」を参照。
- 43 『読売新聞』（1898年12月19日付）「西郷隆盛翁銅像除幕式」より引用。
- 44 観音堂は第一区、仲見世は第二区、伝法院付近は第三区、大池と奥山の一部は第四区、花屋敷と残りの奥山は第五区、埋め立ての新開地は第六区とされていた。
- 45 同書19～20頁を参照。
- 46 『日誌』1898年（明治三十一年）8月18日を参照。
- 47 現在の赤羽駅に近い稲付城跡である。
- 48 日華学堂はいつ廃校したのかはっきりした記録がない。『日華学堂日誌』の記録は1900年10月26日までで、同年に学生が入学した記録がなかった。しかし、学生監督として高楠順次郎は1902年11月に求是書院派遣と南洋公学派遣の学生6名のために学資金増額の申請書を提出した記録があるので、保証人としての立場は1902年11月まで続いていたことがわかる。

## 参考文献

- ・ 東京大学『東京大学小石川植物園草木図説』（巻一～巻三、丸善、1886年）
- ・ 『日華学堂章程要覧』（『皇朝蕃艾文編』第一六卷所収、上海官書局、1899年6月）
- ・ 宮部治郎吉、高橋友夫編『東京郷土地誌遠足の友』（金昌堂、1903年）
- ・ 上村貞子編『官公私立諸学校就学案内』（博文館、1904年）
- ・ 戸川残花口述『江戸史蹟』（内外出版協会、1912年）
- ・ 石渡保次郎『東京遊覧案内』（石渡正文堂、1914年）
- ・ 山田肇『植物園往来』（山田肇発行、1927年）
- ・ 実藤恵秀「中国人日本留学史稿（五）」（『日華学報』第六二号、1937年7月）
- ・ 『宝閣先生追悼号』（中央商業学校編、三秀舎、1940年）
- ・ 前嶋信次「史話 高楠順次郎」（『大法輪』1951年7月号～10月号）
- ・ 鷹谷俊之『高楠順次郎先生伝』（武蔵野女子学院、1957年）
- ・ 曹汝霖『一生之回憶』（伝記文学出版社、1970年）
- ・ 『雪頂・高楠順次郎の研究 その生涯と事蹟』（武蔵野女子大学仏教文化研究所編、大東出版社、1979年）
- ・ さねとうけいしゅう『中国人日本留学史』（くろしお出版、1981年）
- ・ さねとうけいしゅう『中国留学生史談』（第一書房、1981年）
- ・ 張玉法『清季の革命団体』（中央研究院近代史研究所、1982年）
- ・ 丁守和、符致興「訳書彙編」『辛亥革命時期期刊紹介』（人民出版社、1982年）
- ・ 『汪康年師友書札』（上海図書館編、上海古籍出版社、1986年）
- ・ 酒井不二雄『東京路上細見③－上野・御徒町・谷中・入谷・根岸』（平凡社、1988年）
- ・ 高嶋米峰『高嶋米峰自叙伝』（大空社、1993年）
- ・ 桑兵『清末新知識界の社團與活動』（生活読書新知三聯書店、1995年）
- ・ 新潮社編『江戸・東京物語 上野・日光御成道界限』（新潮社、1997年）
- ・ 大里浩秋、孫安石編『中国人日本留学生史研究の現段階』（御茶の水書房、2002年）
- ・ 田中比呂志『清末の江蘇省における諮議局の設置と地域エリート』（東京学芸大学紀要 第3部門 社会科学、2004年）
- ・ 堀切直人『浅草 江戸明治篇』（石文書院、2005年）



- ・徐蘇斌「戦前期日本に留学した中国人技術者に関する研究」(『表現における越境と混淆: 国際日本文化研究センター共同研究報告』所収、井波律子、井上章一編、国際日本文化研究センター、2005年9月)
- ・川崎真美「清末における日本への留学生派遣—駐清公使矢野文雄の提案とそのゆくえ—」(『中国研究月報』、第六〇巻 第二号、2006年2月)
- ・徐友春主編『民国人物大辞典 増訂版』(河北人民出版社、2007年)
- ・陶英恵『民国教育學術史論集』(秀威資訊科技股份有限公司、2008年)
- ・『「帝都」のガイドブック モダン都市文化31』(和田博文監修、藤本寿彦編、ゆまに書房、2008年)
- ・高山秀嗣「高楠順次郎にとつての〈教育〉」(『仏教経済研究』駒沢大学仏教経済研究所、2009年5月)
- ・酒井順一郎『清国人日本留学生の言語文化接触』(ひつじ書房、2010年)
- ・呂順長『清末中日教育文化交流之研究』(商務印書館、2012年)
- ・史洪智「日本人法学者と清朝末期の政治改革」(『近代世界の「言説」と「意象」: 越境的文化交渉学の視点から』関西大学文化交渉学教育研究拠点、2012年1月)
- ・横井和彦、高明珠「中国清末における留学生派遣政策の展開: 日本の留学生派遣政策との比較をふまえて」(『経済学論叢』同志社大学、2012年7月)
- ・柴田幹夫「『日華学堂日誌』一八九八〜一九〇〇」(『新潟大学国際センター紀要』第九号、2013年)
- ・韓立冬「『五校特約』下の一高特設予科: 修了者の進路を中心に」(富士ゼロックス株式会社小林節太郎記念基金編、2014年)
- ・金富軍「張煜全在清华学校的教育实践考察」(『教育史研究』2014年第3号)
- ・黄政傑編『教育行政與教育發展: 黃昆輝教授祝壽論文集』(五南圖書出版、2015年)
- ・樂殿武「大正時代における中国人留學生の生活誌—寄宿舎生活に関する考察—」(武蔵野大学グローバル教育研究センター紀要『Global Communication』第5号、2015年3月)
- ・洪涛「清末留日學生—江蘇省を中心に—」(花園大学文学部研究紀要、2016年)
- ・張允起『日本法政思想研究』(元照出版公司、2017年)
- ・胡穎「清末の中国人日本留學生に関する研究—主に留學經費の視点から—」(神奈川大学大学院『言語と文化論集』特別号、2017年3月号)
- ・樂殿武「高楠順次郎の教育思想——日華学堂の學生の転地勉學を通じて」『武蔵野大学 GLOBAL STUDIES3』(2019年3月)

## 資料『日華学堂日誌』における外出記録

	日付	外出先	備考
1	1898 年 7 月 21 日（木）	夕飯後、東京帝国大学のキャンパス内を散歩	求是書院 4 名
2	7 月 22 日（金）	夕飯後、上野公園に散策	
3	7 月 23 日（土）	団子坂に遊ぶ	
4	7 月 24 日（日）	築地厚生館に浙江巡撫派遣遊歴員蔣嘉名らに 面会	
5	7 月 29 日（金）	夕飯後、本郷館と湯島辺りに散策	
6	7 月 31 日（日）	上野公園、博物館、動物園、パノラマ館	
7	8 月 4 日（木）	勸工場に遊ぶ	
8	8 月 7 日（日）	築地厚生館	
9	8 月 14 日（日）	小石川植物園、途中雨に遭い、引き返した	
10	8 月 18 日（木）	開化楼へ辻武雄送別会に出席	
11	8 月 21 日（日）	浅草凌雲閣、観音菩薩お参り	
12	8 月 27 日（土）	大橋、夜学生らを湯島で招待	
13	8 月 28 日（日）	築地厚生館	
14	8 月 30 日（火）	夕方、上野公園に散歩	
15	9 月 4 日（日）	早起、学生らと散歩	
16	9 月 18 日（日）	小石川植物園に観覧	25 日、汪有齡入 学、宝閣入堂
17	9 月 28 日（水）	浙江派遣遊歴員蔣嘉名ら帰国、横浜に見送る	
18	10 月 2 日（日）	朝食後、街路を萬世橋まで散歩、酒匂宅訪問	
19	10 月 7 日（金）	上野公園に遊び、本郷街を散歩	
20	10 月 15 日（土）	朝食後、小石川植物園に遊ぶ	
21	10 月 16 日（日）	夕食後、街路を散歩、桜井宅訪問	
22	10 月 17 日（月）	朝食後、団子坂、道灌山、飛鳥山、上野に散 歩	神嘗祭
23	10 月 22 日（土）	学生ら自由散歩	
24	10 月 23 日（日）	上野、白馬会油絵展覧会を見学	
25	10 月 28 日（金）	夜、学生ら散歩	
26	10 月 30 日（日）	朝食後、学生一同洋服を着て厚生館に孫滄を 訪問	
27	10 月 31 日（月）	孫滄と学生ら 6 名、上野に散歩	呉振麟入学
28	11 月 5 日（土）	梅原は汪、呉と浅草に、宝閣は 4 名と靖国神 社大祭を見学、大学の運動会を見学	
29	11 月 6 日（日）	学生ら自由散歩	
30	11 月 12 日（土）	学生一同、三崎町嘉納塾を訪問	
31	11 月 15 日（火）	巢鴨穴戸宅に紅葉を鑑賞、郊外を散策	
32	11 月 19 日（土）	上野に遊ぶ、動物園、団子坂で菊細工を鑑賞	
33	11 月 25 日（金）	午後、学生ら高等学校の剣道試合を見学	
34	12 月 11 日（日）	午後、学生ら散歩	
35	12 月 25 日（日）	学生一同、上野に散歩	
36	12 月 29 日（木）	学生一同、梅原宅を訪問	28 日より冬休み
37	12 月 30 日（金）	学生一同、王子に嵯侃を訪問	
38	12 月 31 日（土）	本郷・神田の本街を散歩、歳末の景色を見る	

39	1899 年 1 月 1 日 (日)	皇居で百官拝賀を見物、銀座、京橋を散策	
40	1 月 2 日 (月)	初荷を見るため散歩	
41	1 月 3 日 (火)	午後、上野を散歩	
42	1 月 4 日 (水)	学生一同、成城学校を訪問	
43	1 月 5 日 (木)	芝浜松町に酒匂宅、高楠宅を訪問	
44	1 月 7 日 (土)	学生一同、浅草に散歩	
45	1 月 9 日 (月)	青山練兵場に観兵式を見学	1 月 10 日始業
46	1 月 17 日 (火)	貞宮内親王葬儀を見学	1 月 20 日南洋公 学 6 名入学
47	1 月 21 日 (土)	梅原、新入生 6 名と公使館を訪問	
48	1 月 22 日 (日)	学生一同、上野公園に散歩	
49	1 月 30 日 (月)	浙江留学生 6 名、公使館を訪問	2 月 6 日陳生入 学
50	2 月 9 日 (木)	南洋生 6 名、汪・呉と横浜へ行く	大晦日
51	2 月 10 日 (金)	学生一同、公使館を訪問	
52	2 月 11 日 (土)	偕楽園で新年会を開く	3 月 21 日鄭生入 学
53	4 月 16 日 (日)	新入生一同、洋装で成城学校を訪問	3 月 31 日北洋組 12 名入学
54	4 月 28 日 (金)	梅原、土屋乙級生と飛鳥山にハイキング	
55	4 月 30 日 (日)	梅原、生徒数名と辻武雄を訪問、土屋・田代 は学生 4 名と早稲田を訪問	
56	5 月 13 日 (土)	中出、生徒数名と芝公園を見学	
57	5 月 16 日 (火)	学生 4 名、成城学校を訪問	
58	5 月 21 日 (日)	美野田・田代、学生 4 名と慶応運動会を見学	
59	6 月 12 日 (月)	19 名の学生は公使館を訪問、端午の挨拶	
60	6 月 17 日 (土)	成城学校を訪問する学生あり	
61	7 月 8 日 (土)	美野田・西出送別会を四谷で開く	
62	7 月 16 日 (日)	生徒の一部、成城学校を訪問	
63	7 月 27 日 (木)	転地勉強のため、塩原へ出発	8 月 27 日まで塩 原に滞在
64	9 月 15 日 (金)	宝閣、学生 7 名と工科大学を訪問	
65	10 月 2 日 (木)	堂生、青山練兵場に観兵式を見物	
66	10 月 4 日 (土)	堂生一同、農科大学運動会を見学	
67	11 月 25 日 (土)	二人、大学下宿屋に学友を訪問し、靴盗難に 遭う	
68	1900 年 1 月 1 日 (月)	学生ら自由散策	
69	1 月 31 日 (水)	堂生、終日公使館を訪問	
70	4 月 30 日 (月)	留学生一同、横浜に至る	